

令和6年度 富山市民 感謝と誓いの つどい

とき 令和6年8月1日(木) 午後1時30分

ところ 富山国際会議場 3階メインホール

主催／富山市民感謝と誓いのつどい実行委員会・富山市

富山市自治振興連絡協議会
富山市老人クラブ連合会
富山市母親クラブ連絡協議会
富山市中学校長会

富山市社会福祉協議会
富山市民生委員児童委員協議会
富山市PTA連絡協議会

富山市遺族会
富山市児童クラブ連絡協議会
富山市小学校長会

小学生絵画最優秀賞

三四年生の部



「富山市の夜空を走る新かん線」
富山市立古沢小学校3年 今村 直緒太さんの作品

小学生絵画優秀賞

三四年生の部



「さいこうの富山市」
富山市立草島小学校3年 田畑 七さんの作品

三四年生の部



「緑いっぱい富山市にしよう」
富山市立桜谷小学校3年 菅原 咲那さんの作品

未来の富山市

五六年生の部



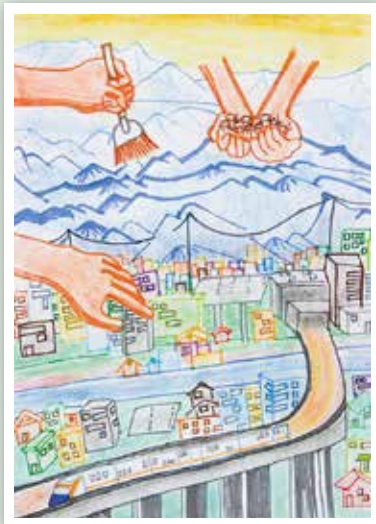
「機械と共に」
富山市立水橋中部小学校6年 銭谷 優里さんの作品

五六年生の部



「全ての生き物が安心して住むことができる富山市」
富山市立古沢小学校5年 大久保 花南さんの作品

五六年生の部



「夢があふれる富山市」
富山市立芝園小学校5年 中野 伶美さんの作品

未来に語り継ぐ 富山大空襲の記憶

富山大空襲の記憶を未来に語り継ぐため、空襲体験者インタビューや戦禍をくぐり抜けた遺品をホームページで公開し、戦争の悲惨さと平和の大切さを後世に伝えていきます。



HPIはこちら

富山大空襲体験文

「無題」

室田 佳子さん

〔令和三年八月寄稿〕

父、松原信行は、帝国大学(京大)卒業後、大連関東局に就職し、大連大和町に居住し、私達兄弟は、そこで誕生しました。

はからずや、父は病気で昭和17年12月16日に、37才の若さで死去致しました。

母は、20才後半(29才)の若さで、10才を頭に6人の子供を持ち、昭和18年1月に内地(日本)に帰って来ました。

故に、富山大空襲(昭和20年8月)当日8月1日夜、空襲警報で防空壕に入りましたが、母はあぶないと思い、3才に満たない未っ子をおんぶし、小さい子から母の手をつなぎ、B29が焼夷弾を落とす真っ赤な火の下を神通川(磯部)の土手に逃げました。その時、母の耳もとで「こっち、こっち」とささやく父の声にしたがい、桜の木の下、焼夷弾の落ちた所、落ちた所へと逃げました。(なぜなら、落とした所へは、落とさないから……)そして、逃げていると番外側の兄(信嘉)の所へ焼夷弾が落ちてきたので、母は一瞬、信嘉はダメかと思った時、桜の木の枝が跳ね返してくれました。

そうして私達兄弟6人と母、全員無傷で助かりました。

母は、桜の木の枝のもとで、みんなに毛布をかぶせ、こんなにもむい(川原でたくさん)の人の死など、光景を見せたくないと思達みんなを守ってくださいました。

(私の近所のお友達は、川原に逃げ、焼夷弾を受け、後に義足となりました。)

母は終戦後に、私たちに、耳もとで父の声などを聞いたと話してくださいました。父が天国、空から私達みんなを守ってくださったと思いました。

そして、ようやく夜が明け、神通川の土手から歩いて、歩いて、歩いている途中、戦火の中、3才、13才の小さい6人をつれている母をみて、出合ったお寺さんが「よく、みんな無事でー」と休みさせてくだされ、まっ白なあったかいおにぎりを1ヶずつみんなにいただきました。とにかくおいしく、その暖かい心づくし、今日でもかすかに脳裏をかすめます。

ようやく古沢村の山崎という農家にたどり着きました。農家に知り合いもなく、その当時のくみ取りに来てました農家です。終戦になり、いつまでも山崎様のお世話になっている訳にもいかず、1ヶ月足らずで焼けあとのわが家の所へ、親戚の人達に小

さな家を建てていただき、もどりました。

まわりは何もなく、大和百貨店だけが残っていたように覚えています。

防空壕の中は、入れたものすべてが灰になつてましたが、父の写真だけが額縁のまま、その灰の中にありました。燃えないで、それだけがそのまま……(今も実家にあります。)

父がみんなを一心に戦火から守ってくださいたのだと思いました。

富山大空襲を幼かった私達兄弟は、身をもつて体験致しました。大きな体験を致しました。

お友達は、足をなくし義足で、その後の人生をいかに過ごしかと思うと……胸がつまります。

現在、6人兄弟のうち、長男の兄(信嘉)が昨年(平成28年)11月に84才で亡くなりました。

戦後、私達兄弟6人を女手つで県立高校まで卒業させてくださいました、母の50回忌も昨年でした。

さて、あと私達5人兄弟は、それぞれに置かれている家族を思い、日々を元気に仕事もし、過ごしています。

絶えず、先祖(祖父、祖母、父母)に深く感謝しながら……。

「平和な富山市とこの先も」

富山市立八尾中学校三年 京 優希さん

私が十五年過ごしてきた富山市。まだ十五歳の私でも、外に出る機会があると気づくのが、その美しさと住みやすさだ。穏やかに富山湾に注ぐ神通川と、いつも静かに堂々とそびえ立つ立山連峰。晴れた日に広がる川、山、空の青色のなんと美しいことか。また、スーパーや学校、病院などの必要な施設が整い、地域住民同士の関わりが深く、そして、空気や水道水がおいしい。とても住みよい場所だ。

しかし、この美しく住みやすい富山市は、かつて第二次世界大戦によって大きな被害を受けた。今から七十九年前の一九四五年八月二日未明、富山大空襲は起きた。調べてみると、約二時間の間に五十万発以上の焼夷弾が投下され、市街地の九九・五％が焼き尽くされたそうだ。被災した人はおよそ十二万人、亡くなった人は二七〇〇人を超え、地方都市としてはかなり傷ましい被害だったという。

直後の市街地の写真を見ると、そこは瓦礫の山だった。私は、今の富山市からは

考えられない事実への驚きや戦争に対する恐怖と怒り、それに悲しみを感じた。また、私は小学生の頃、八尾町に住む祖父から、その日その時、城ヶ山から見えた光景について、

「中心部（とやま）とその空が真っ赤に燃えとった。恐ろしかった。」

と聞いたことをよく覚えている。これは、私がいつか見た空爆の写真が白黒だったのに、炎の赤と熱をも連想でき、忘れられない出来事になった。

考えてみると、そんなにも大惨事の状況だったにも関わらず、今、平和な富山市があるということは、どれほどの人が復興に尽力したことか。住む家も食べる物も、大切な家族までも失い、想像もできないほど、苦しんだであろう。それでも前を向き、富山市を立て直してきた先人たちは、尊敬と感謝の気持ちでいっぱいだ。

私は、富山市が大好きだ。では、今を生きる私たちが富山市のためにできることは何だろうか。それは、富山大空襲があったという事実を忘れないことや富山市を再建してきた先人たちの努力に感謝すること、今ある平和を大切に、幸せな人生を送ることだと私は考える。そしてこの平和な富山市を未来へと繋いでいきたい。

「平和を受け継ぐ」

富山市立藤井中学校三年 西巻 秋美月さん

「修学旅行に向けて平和学習を始めます。」
二年生の冬、教室で担任の先生からそう言われたとき、自分はこれまであまり「戦争」について考えてこなかったことに気が付きました。私の祖父母は一九四〇年代生まれで、戦時中のことをあまり覚えていません。家族のなかで戦争の話が話題に上がることがほぼなかった私は、戦争とは「怖い」もので、「よくないこと」という漠然としたイメージしかありません。戦争についてあまり触れてこなかったからこそ、平和学習を通して「戦争とはなにか」を知りたい、深く学びたいと思いました。

迎えた五月。修学旅行で私は初めて、広島市の平和記念資料館を訪れました。おぞましい戦禍を伝える写真や展示品の数々に、足がすくみそうになるときもありました。一方で、資料館には戦後、平和の道を歩み始めた日本の軌跡が紹介されていました。戦争や原爆の残酷さ、悲惨さを風化させないため、戦争を体験した人々は自らの体験を語ったり、手記に残したりと、活動に励みました。現在では、被爆体験のない世代が被爆地の記憶を受け継ぎ、私が現地で語り部の方による講話を聞いたように、国内外で語り継ぐ取り組みを行っているそうです。

学校に帰ってきてから、さらに平和学習を進める中で、私は「富山大空襲」のことを知りました。どこかで耳にしたことのある言葉ではありましたが、詳しいことは何も知りませんでした。広島で見た景色が心に深く刻まれていた私は、富山大空襲について調べ始めました。一九四五年八月二日午前〇時三六分、米軍のB29大型爆撃機七四機が、富山市中心部に五十万発以上の焼夷弾を投下しました。市街地のほとんどを焼き尽くしたこの空襲により、多くの犠牲者が出ました。八月十五日に終戦を迎えた日本。富山にも大きな爪痕が残りましたが、当時の人々はこのことから諦めませんでした。富山市は戦後すぐに、戦災復興へと歩み始めたのです。

終戦から約八十年。時代が移り変わる中で、私たちが住む街に戦争の爪痕を見つけることはほとんどできなくなりました。これは、先人たちの努力の結晶です。その一方で、この恵まれた環境は、今を生きる人々が戦争の悲惨さを忘れてしまうという事態を招いているとも、私は考えます。戦争が現実になり、私自身も、私自身も莫大な被害を受けたことを、まずは私自身も忘れることなく、過していきたくです。同時に、先人が数え切れないほどの困難とつらさを乗り越えて築き上げたこの平和を後世へ受け継いでいきたいと思います。さらに、戦争を知らない私だからこそ、戦争についての学びを止めることなく、これまでのふるさと富山を創ってきた先人たちに肩を並べられるよう、今できることを探し、未来に繋げられるように尽力していきたいです。

「「平和」を考える」

富山市立城山中学校三年 畑野 奈々恵さん

「平和」とは何か。学校の授業などでも平和について考える機会はあるがこの世には本当に「平和」というものが存在するのか。過去に第二次、第二次世界大戦などの大規模な戦争を経験してきた今でも、まだ戦争をしている国は少なくない。

一九四五年八月二日、この富山の街で大空襲が起こった。米軍の大型爆撃機が、富山の市街地の九十九・五％を焼き尽くした。被災者はおよそ十二万人、亡くなられた方は二千七百人を超え、地方の空襲としてはかなり大規模なものとなった。

想像できるだろうか。何気ない楽しい日常が、空襲を受けることで全て奪われる。私達の世代は、戦争を経験したことがない人がほとんどだと思うが、このような事があつてはならないということは分かるはずだ。しかし、戦争はどこかで起きてしまう。では、今の私達にできることはなんだろうか。

現在の富山の街を見渡してみると、過去に大空襲が起こったようには考えられない風景が見られる。これは、大空襲で失った様々なものに對する悲しみや絶望に立ち向かいながら、今ある私達の富山の街を築き上げてきた先人達の努力のおかげだ。どんなに苦しく、悲しく、困難であつても、明るい富山の未来のため、懸命に復興・発展に励んでくれた。

この事実が受け継がれた今、私達にできる事。まずは、先人達に感謝することだ。毎年八月一日に行われる富山の花火大会は、戦争被災者の追悼、平和を願ったものである。これを家族や大切な人と見られるのは、先人達の努力があつたからである。この努力がなければ、今日（こんにち）のように当たり前の日々を過ごすことはできないかもしれない。そして、先人達から受け継いだ、戦争による悲しみや絶望を、私達が次世代に伝え、それを忘れないこと。富山大空襲が起こった日から七十九年を経とうとしている今、この出来事を忘れつつあるのではないかと思う。このようなことを二度と起こさないために、戦争を知り、次世代に語り継ぐことが最も重要だと思う。

「平和」とは何だろうか。私達が平和について考えている今も、戦争が起こっている国がある。でも、未来を担う私達が戦争の残酷さを理解し、語り継ぐことで戦争を防ぐことはできるはずだと思う。それが達成された時が、本当の「平和」だと私は考える。この世から完全に戦争をなくすることはできなくても、戦争に近づけないための努力をすることが今、私達に求められているのだから。

中学三年になり進路を考えるような機会が増えたなか、私は自衛官を目指すと思う。自衛官の仕事は、国を守ることにつまり平和を維持することだと私は考える。これからも平和な毎日を過ごせるよう、私は自衛官になりたいという目標を掲げ日々努力していきたい。

式典

1.国歌斉唱

2.黙とう

3.開会あいさつ

富山市長 藤井 裕久

4.中学生作文最優秀作品の発表

「平和な富山市とこの先も」 富山市立八尾中学校三年 京 優希さん

5.富山大空襲体験文の朗読

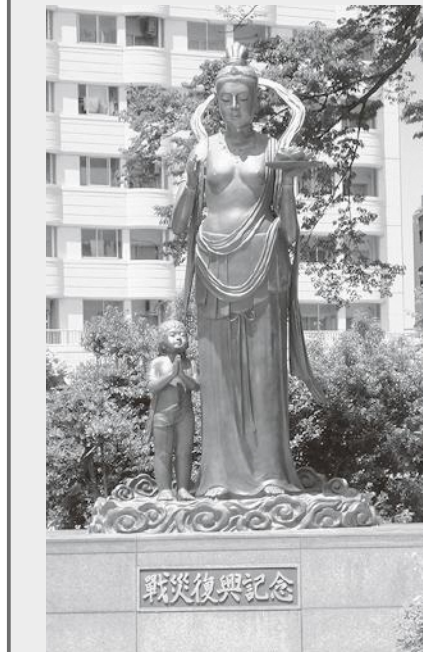
「無題」 室田 佳子さん
朗読／声のライブラリー友の会 八木 逸子さん

6.代表献花及び一般献花

演奏／レーベン弦楽四重奏団
第1ヴァイオリン 渋谷 優花さん
第2ヴァイオリン 藤田 千穂さん
ヴィオラ 嶋 志保子さん
チェロ 富田 祥さん

7.閉会あいさつ

富山市民感謝と誓いのつどい実行委員会 会長 北岡 勝



戦災復興記念像(天女の像)

建立 昭和49年8月1日 場所 富山城址公園自由広場北西側

碑文 昭和20年、太平洋戦争は激烈の度を加え、8月2日未明に、富山市は、B29百七十余機の焼夷爆弾攻撃を受け、市街地は一夜にして焦土と化しました。
約2万5千の世帯、11万人の市民が罹災し約8千人が重軽傷を負い、2千7百余人の尊い命が失われ、まさに、壊滅的な状況になりました。
惨憺たる焼土と、絶望の虚脱の中から、富山市民は、平和を渴望し郷土の復興に気力を燃やし、槌音高く、県都富山の再建に立ち上がりました。
市民の決意と総力の結晶が実を結び、戦災復興の大事業が完成し、今日の近代的都市に生まれ変わりました。

この天女の像は、恒久の平和を念願するとともに、尊い犠牲に敬虔な祈りを捧げ、市民の努力による偉大な業績を記念して、富山復興特別事業協議会により、昭和49年8月1日に、戦災復興記念像として建立されたものです。

平成20年8月1日 富山市